

## パイプのけむり

2023. 11. 16

エッセイを読むのが好きである。随筆や随想というものもある。これらは、言葉の意味として、区別することができる。だが、実際の文章を読んで、これはエッセイ、これは随筆、これは随想というように分けるのはむずかしい。

高校生の頃だったか、「パイプのけむり」というエッセイと出会った。作曲家である團伊玖磨による文章である。1964年から1000回以上にわたって連載された。当初は3か月だけの契約だったが、好評につき延長され、2000年に雑誌が休刊となるまで続く長期連載となった。

高校生の頃に、様々な文章と出会うきっかけとなったのが、大学入試に向けての模擬試験である。教科は国語である。いい文章がたくさんあった。読んでいて、おもしろかった。だが、悲しいかな問題を解かなければならない。

「パイプのけむり」もおもしろかった。時が経ち、数年前になるが、ある温泉旅館ホテルに泊まった。夕食を終え、ちょっとくつろげるスペースがあった。暖炉もあった。そこには、「パイプのけむり」が並んでいた。長期連載を計27巻の単行本にまとめたものである。そのタイトルが、いかにも團伊玖磨である。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」はわかる。「続々パイプのけむり」もまだ許せる。さて、次はどうするのか。「又パイプのけむり」ときた。「又々パイプのけむり」となり、次はというと、「まだパイプのけむり」「まだまだパイプのけむり」となった。その後も、「なお」「重ねて」「なおかつ」「またして」「さて」「ひねもす」「よもすがら」「明けても」「暮れても」「じわじわ」「どっこい」そして、第27巻が「さよならパイプのけむり」となる。

古くて懐かしい本だった。しっかりと手に取り、丁寧にページをめくった。この本への敬意を表したくなった。「キングダム」などとは明らかに違う扱いだった。読み始めた。どうも期待したものとは違った。あの頃は、おもしろく感じたものが今では違っていた。色褪せたわけではない。こちらの見方や考え方が変わってきたのだろう。それでも、読み進めた。

プロの作家のエッセーもいいが、音楽家、画家、科学者、数学者など、その道の一流人が書いたエッセーがいい。国語の先生や作家だから、いい文章を書けるわけではない。何を感じているかだろう。それが、創作活動や研究などに生かされるのではなかろうか。

1000回以上の連載を成し遂げた團伊玖磨ではないが、毎日、文章を綴っている。今の自分のベースになっているのは、五木寛之、塩野七生を経て、震災後の伊集院静である。2011年のトランヴェールのエッセイである。東京に向かう新幹線の中で、涙を浮かべながら読んだ。それが毎月続いた。そこから、伊集院静のエッセイを読むようになった。

「パイプのけむり」を検索すると、ホテルやお店がたくさん出てくる。福島にも、老舗のお店がある。名物マスターは亡くなってしまったが、お弟子さんが、跡を継いでいる。昔から、團伊玖磨の「パイプのけむり」と名物マスターが妙に合っていると思っていた。味わいのあるお店である。本日で901号となった。1000という数字が見えてきた。気分だけでも團伊玖磨でいこう。